The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パンジャービー語のスーフィー文学に現れるヨーガ行者 : ワーリス・シャー作『ヒールとラーンジャー』に含まれるナータ派に関する記述
Author(s)	北田, 信
Citation	ウルドゥー文学. 2016, 18, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57165
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パンジャービー語のスーフィー文学に現れるヨーガ行者

～ワーリス・シャー作『ヒールとラーンジャー』に含まれる

ナータ派に関する記述

北田　信

【略号】

A. = Arabic　H. = Hindī　MIA = Middle Indo-Aryan　Pers. = Persian
Panj. = Panjābī　Skt. = Sanskrit　U. = Urdu

【テキストとパンジャービー語表記についての注記】

本稿で扱うワーリス・シャー著『ヒールとラーンジャー』のテキストには、口頭伝承に基づいた様々な版本がある。本稿ではその中から、ハーシミー版 [Hāšimī, Ḥamīdullāh Šāh 出版年不明] を選び、用いた。ハーシミー版には、パンジャービー語原文の他に、比較的忠実な現代ウルドゥー語訳と詳しい語釈が付いており、最も使いやすい。また、これに次いで語釈の詳しいミサーリー版 [Miṣālī 2005] を適宜、用いた[1]。

パンジャービー語原文を引用する際のローマ字転写においては、実際の発音よりも原文のアラビア文字表記を優先した。具体的に言うと、今日標準的だと見なされるパンジャービー語の発音において、気音 h ならびに有声帯気音 (gh, jh, dh, ḍh, bh) の帯気は消失し、その代わりに高低アクセント（声調）を生み出すが、本稿では声調を表記することはせず、原文のアラビア文字表記に従って h で表記する[2]。

---

[1] ハーシミー版とミサーリー版のパンジャービー語テキストは、似通っているものの、多くの異読を含み、しばしば詩節の順番が食い違っている。より精密なテキスト研究のためには、他の注釈者達による版本も参照しなくてはなるまい。版本の間に多くの異読（ヴァリアント）が存在することからも、ワーリス・シャーのテキストが口頭伝承に基づいていることは明らかである。いずれにせよ、口承文芸としての性格が強いこの種のテキストを研究する際に、一人の作者が書いた唯一の原テキストを復元する、という古典的な文献学の方法論は通用しないであろう。

[2] インド・アーリア諸語の有声帯気音にあたるものが、パンジャービー語においては声調を伴う、とされる。ただし、パンジャービー語のアラビア文字表記において、高低の抑揚を生み出す要素が、アラビア文字 he [h] で表記され

パンジャービー語には反り舌の鼻音があり、これを下点のついた ṇ で転写する。これに対し、上点のついた ṅ を、鼻母音の記号として用いる[3]。パンジャービー語のアラビア文字表記において、子音の直前に書かれた Nūn 文字は、その子音に同化するか、鼻母音化するが、本稿のローマ字転写では n に統一し、区別しなかった。

必要に応じて、新期インド・アーリア諸語に広く見られる潜在母音（短母音 a があると想定されるが、実際の発音には現れないもの）を、ダッシュ記号 ' で表記した[4]。

【本文】

18 世紀のパンジャービー詩人ワーリス・シャーが著した物語詩『ヒールとラーンジャー』（以下『ヒール』と略す）は、パンジャーブのスーフィー文学を代表する作品の一つである。パンジャーブ地方の一農村の族長の娘ヒールと、流れ者の孤児・水牛飼ラーンジャーとの身分違いの恋、およびその悲劇的結末を語った作品である。筆者は 2012 年よりこのテキストを読み進め、それについての論考を発表している [北田 2015A、北田 2015B]。その際に得た

る、ということは、この要素は帯気音の性質を完全には失っていないことを示唆する。

この要素について、岡口 [1988: 14] は「有声音と同じく息の通路を一瞬ふさいでから一気に発音されるのですが、その際強い呼気は伴わず、それが音程の変化として発音される」と説明する。萩田 [1996: 18] は「普通よりも低い音程で喉（声門）を緊張させ狭めるようにしてわずかな息の途切れの後に母音が発音されます。そして次の音節で普通の音程にもどります」と説明する。Cunnings & Bailey [2005: xvii] は "The deep sound represented by *h* occurs always in an accented syllable before the vowel. It distantly resembles the Arabic *'ain*, and can be enunciated only on a low tone. It strikes the ear as a deep guttural sound." と説明する。

つまり、この h はおそらく有声の気音（国際音標記号で ɦ と表記される音）に近い音であり、アラビア語の 'ain に似て、喉の奥（声門の付近）の若干の緊張を伴うものなのであろう。パンジャービー語の発音に関する筆者の経験は少ないものの、ネイティヴの発音からはこのような印象を得た。喉奥の緊張が、場合によっては放出音 (ejective) や内破音 (implosive) に似た効果を持つようにも感じられ、岡口（上記）や萩田（上記）の記述を裏付けるように思われる。パンジャービー語のこの現象との関連性は明らかではないものの、隣接するスィンディー語の音韻には内破音が存在する [萬宮 2010: 9]。

[3] これはパンジャービー語の転写に限った話であり、サンスクリット・アラビア語・ペルシア語については、それぞれの慣習的な転写法に従う。

[4] ただし、語末の場合を除く。語末に潜在母音がある場合は、それを見分けることは容易なので、殊更、明記する必要性はあまりない。

印象は、『ヒール』のテキストで用いられている言語は、アラビア文字で表記されてはいるが、意外にアラビア・ペルシア語からの借用語は少なく、むしろサンスクリット語からの借用語や新期インド・アーリア語彙（いわゆる tadbhav）を多く含む、ということである。それだけでなく、南アジアに古くから言い習わされてきた言い回しやことわざなども豊富であり、“スーフィー文学”に分類されているにもかかわらず、『ヒール』には、南アジア土着の文芸伝統に属する作品としての性格が顕著に見てとれる。作者はワーリス・シャーという実在の人物であるということになっているが、実際にはパンジャーブ地方に古くから語り継がれてきた民間伝承テキストが材料として利用されている疑いが強い。その上、この作品が民衆の人気を得て口頭で民間に流布していく過程で、ワーリス・シャー以降の複数の無名の作者の作詩したものが多数混入したのだろう、ということも、『ヒール』の複数のヴァージョンの間に相違が観られることから推測される。“スーフィー文学”と銘打っておきながら、『ヒール』のテキストには異教的な要素がかなりの割合で混ざり込んでいる。

『ヒール』の中に現れる異教的な要素の中でもとりわけ異様なのは、第 253 歌から第 287 歌においてヨーガの修行が扱われるくだりである[5]。恋人ヒールから無理やり引き離されて村を追い出されたラーンジャーは、ヒンドゥー教のヨーガ行者の道場を訪ね、弟子入りして剃髪し修行者となるのである。ヨーガ行者 (Panj. jogī < Skt. yogin) の名はバールナート Bāl'nāth といい、ナータ派という流派に属する人である。このくだりではナータ派のヨーガに関する教義が述べられるが、イスラームの見地からそれを批判する、ということは全く行われない。“グル” guru と呼ばれるバールナートのヨーガやヒンドゥー教の信仰に関する教えは、そのままイスラームの一神教的な神への信仰についての教えとして読みかえられており、否定されることはない。ここではヒンドゥー教徒のヨーガ行者の語る教義が、スーフィーの信仰とオーヴァーラップしているのである。

ナータ派については Briggs 2009 が詳しい。ナータ派の修行者はハタ・ヨーガを実践し、伝説的な開祖ゴーラクナート Gorakh'nāth を信ずる。ナータ (Skt. nātha) とは“主人、師匠”というような意味であるが、この名称の他に、この派の修行者は、開祖の名にちなんで Gorakh'nāthī、あるいは耳に切れ込みを入れる習慣があるので Kān'phaṭa “耳を裂いた人々”と呼ばれたりする[Briggs 2009: 1]。インド・パーキスターンの分離独立以降、パーキスターンに所属する諸地域におけるヒンドゥー教の風習についてはあまり情報が入ってこないが、英領期に書かれた研究である Briggs [2009:98] によれば、パンジャーブ地

[5] 歌番号はハーシミー版に依る。物語詩の終わりに近い第 576 歌にもヨーガ行者が登場する。

方にはもともとナータ派の聖地が多数あった[6]。たとえば詩人イクバールの生誕地として知られるスィアールコートも、ナータ派の中心地のひとつであったようだ[7]。

第 274 歌では、バールナート師の弟子たちは師匠の教えに従い、聖地に巡礼する。

第 274 歌[8]

弟子たちはグルの言葉 (Panj. bacan < Skt. vacana) を実行した。行って、天国の土を得た[9]。
みんなで 360 箇所の巡礼地 (Skt. tīrtha)[10] に詣でた。グルたちの御言葉 (Skt. vāc)・真言 (Skt. mantra) を唱えた[11]。
9 人のナータ達、52 人の勇者 (Panj. bīr < Skt. vīra) 達、64 人の女性ヨーガ行者 (Panj. jogan) とともに、愉楽した (rasīlĕāṅ)。
6 人の修行者 (Panj. jatī < Skt. yati)[12]、10 の化身 (Panj. autār < Skt. avatāra)[13] がやってきた。[その御方達の] 中には生命の水 (Pers. āb-ĕ-ḥayāt) の池 (Panj. jhīlĕāṅ) がある[14]。

---

6 ラジャスターンの楽師が伝えるナータ派伝承についての研究 Gold [1992: 64] にも、同伝承がパンジャーブにも流布していることが見える。
7 この種の宗教混淆は、今日のパーキスターンでも、注意深く観察すれば方々で見つかる興味深い現象である。筆者が 2013 年にタキシラーのガンダーラ遺構を訪れた際にも、仏教僧院遺跡モーラ・モラドゥの仏塔の傍らにスーフィー聖者の墓地が祀られているのを観察した。
8 ミサーリー版では p. 483 にある。
9 グルの教えを実行することにより天国に入る為の功徳を得た、という意味。
10 サンスクリット語の語末の短母音 a はパンジャービー語の発音では消失するが、サンスクリット語であることを判別することが容易になるようにと考えて、ローマ字転写では省略しなかった。
11 kīlĕāṅ. 意味不明。
12 ウルドゥー語注によれば、Bhīṣma Pitāmaha, Pūraṇa, Gopīcand, Gorakh'nāth, Lachman (= Skt. Lakṣmaṇa), Hanumān のことであるという。Gopīcand については Gold 1992 を参照せよ。
13 ヴィシュヌ神の十の化身のこと。
14 サンスクリット語の amṛtāśaya “アムリタ（甘露）の貯水池” という複合語の訳として、聖者や化身たちの内面から生命の水があふれ出るかのようである、ということか。Panj. jhīlĕāṅ を“池”と訳したが定かではない。動詞の完了分詞である可能性もある。

ヒンドゥー教の巡礼地を一般に tīrtha と言うが、ここではナータ派の修行者たちが集まる場所のことを意味する。「9 人のナータ達」とは、開祖ゴーラクナートに続くナート達である。「勇者」(vīra) とは、Briggs [2007: 282] には「完全なる自己制御を達成した者」とあるが、その人数が 52 であるということは書いていない[15]。「生命の水」(Pers. āb-ĕ-ḥayāt) は、アムリタの訳語であろう。

興を惹くのは「64 人の女性ヨーガ行者」であり、ウルドゥー語注によればドゥルガー女神の眷族のヨーギニーのことであるという[16]。Briggs [2007: 171] によればヨーギニーとはドゥルガーを取り巻く妖精・魔女たち (fairies or sorceresses) で人数は 8、あるいはドゥルガー女神の化身とみなされる場合もあり、その際には 60 とか 85 と数えられる。テキストの 64 という数はこれには合わないものの、同じものを意味していると思われる。ヨーギニーたちとともに「愉楽した」(rasīlĕāṇ) とあるのは意味深い。この語は Skt. rasa “味・悦楽” に由来し、感覚的な快楽を愉しむことを意味するが、ときには性的な意味合いを含むこともある。タントラのヨーガ行者達は、秘密の儀礼において魅惑的なヨーギニーと交わることがあったと伝えられる。「愉楽した」という表現は、それを痕跡的に示しているように見える[17]。

実際『ヒール』第 121 歌（第 3 行）では、ラーンジャーはパンジャーブ地方の土着的イスラームで崇拝される五聖者に祈りながら、自分のことを放浪修行者になぞらえ、ヒールのことを “ヨーギニー” と呼んでいた。

「私を修行者 (malang) にならせて下さい。[修行者の身体に塗る為の] 灰 (Skt. vibhūti) を下さい。」
[五聖者はラーンジャーに告げる。]「彼女（＝ヒール）もお前の女性修行者 (Skt. yōginī) [である]」

ワーリス・シャー作『ヒール』では断片的・痕跡的にしか分からないようになっているが、ラーンジャーがナータ派の放浪修行者となってヨーギニー・ヒールを求めて愛染の行を修める、という隠された古いストーリーが垣間見える。

---

[15] Briggs のこの記述は、修行者 (sādhaka) に獣・勇者・天的者 (paśu, vīra, divya) という三段階があることについてであるから、文脈が異なるように思われる。
[16] アラビア文字で綴られているため正確な語形が不明なものが多いが、彼女達の名は abeš, malkarān, khāhrā, anil bān, budh tāp, bikrit などであるという。
[17] そのことを知ってか知らずか、ウルドゥー語訳は、jog'noṅ se pyārī mulāqāt huī「ヨーギニーたちと愛情あふれる会見がなされた」と訳す。

第 259 歌ではヒンドゥー教の宗教用語が列挙される。

第 259 歌[18]

世の中 (jag) のすべてのことどもは夜の夢。富と財を決して残念がってはならない。

五要素 (panj bhūt)、変化 (bikār < Skt. vikāra)、食欲 (udar pāpī)[19] を、忍耐 (A. ṣabr)と満足 (Panj. santokh < Skt. santoṣa) によって満たすべし。

熱[20]を捨てて、苦と楽 (dukh sukh) は一様に[21]みなされる (jāpe)。絹のショールも縞のついた布 (bhūrīe)[22] も［一様に見なされる］ように。

存在 (Skt. bhava)、自我 (Skt. ātmā)、欲求 (Skt. vaśa)、愉楽 (Skt. rasa) を誰が捨てる (tyāge) だろうか？それなら、グルをどうして侮辱しようと言うのか？

恋がうまくいかないからといって出家してしまおうとする青年ラーンジャーを諭して、出家者バールナート師は、ヨーガの修行が非常に困難であることを説き、出家を思いとどまるよう諭す。ヨーガの修行について述べられた用語のほとんどはサンスクリット語である。「五要素」と訳した panj bhūt は、ヒンドゥー教の用語としては通常、世界を構成する五つの物質的要素（地水火風空）のことを指すが、ハーシミー注は「貪欲、蒙昧、我慢、意欲、富（所有欲？）」(lobh, moh, hankār, vašā, dhan) としており、この文脈にはそぐう[23]。「変化」(Skt. vikāra) とは、心・感情・思考のとどまることを知らない変化[24]。心が動くために苦しみが生じる。

「熱」と訳した ušan (Skt. uṣṇa) を、ハーシミー注は、宇宙の五つの構成要素（火・水・地・風・空）あるいは五つの欲求（色欲 kām、怒り krodh、貪欲 lobh、蒙昧 moh、我慢 hankār）が持つ“激しさ” (tezī) と解する[25]。しかし Skt.

---

[18] ミサーリー版では p. 456 にあたる。

[19] udar pāpī. 原義は“罪深い腹”つまり“飽きることのない胃袋”ということ (cf. H. pāpī peṭ)。

[20] ハーシミー版では āsan となっているが、おそらく ušan < Skt. uṣṇa“熱”の書き間違い。

[21] ミサーリー版を参考にして sahāṅ を samāṅ と読み替えた。

[22] Panj. bhūrā は、薄茶・黒あるいは白・黒の縞のある布地のこと [Singh 1983]。

[23] ただし、その典拠は不明。

[24] もし panj bhūt を「五つの宇宙構成要素」の意味にとるなら、それらの結びつきが変化を繰り返し、恒久的な物質は存在しないこと、と解することもできる。

[25] つまりハーシミー自身も panj bhūt を“宇宙の五構成要素”と解する可能性を排除していないのである。ただし宇宙の五構成要素が“熱”を持つという

uṣṇa には“悲嘆”という意味もあり、むしろこの意味を採用して「悲嘆を捨て、苦楽を一様に見なすべし」というふうに解するべきであろう。

最後の詩節では、ヒンドゥー哲学の最重要概念のひとつ、自我（アートマン）までが言及されている。ハーシミー版には欠けているが、ミサーリー版に含まれる詩節はこの修行のことを「ヨーガ」(Panj. jog) と呼ぶのである [Miṣālī 2005:456]。

ワーリス・シャー殿よ、自分自身を滅ぼすなら、そのときにヨーガが得られる。

続く第 260 歌で修行者バールナートはさらに言う。

第 260 歌[26]

［君は[27]］享楽 (bhog) を享受し (bhognā)、乳とヨーグルトを飲み、身体 (pinḍā < Skt. piṇḍa) を保持し、夜も昼も洗浄する。
清貧 (faqr) の道を目指すのは、とても難しい。［君は］口先で［出家するなどとを言って］どうして損をするのか？
［君は］竹笛を吹き、女たちをつねに眺め、牛 (f. pl.) や水牛 (f. pl.) たちを楽しませて[28]乳を搾る (coŏnā)。
本当のことを言いなさい。ジャート族[29]の若者（＝ラーンジャー）よ、君に何が起こったのか？なぜ快楽 (swād) を捨てて、土埃になろう（＝まみれよう）とするのか？

Skt. bhog の原義は“食べること”であり、それが転じて“享楽”、さらにヒンドゥー哲学の文脈においては“現世的経験”全般（快・不快を問わず）を意味するようになった[30]。もともと食欲に基づいた表現であるからこそ、その象徴として乳・ヨーグルトが言われ、それらの栄養分によって養われる身体は Panj. pinḍā と呼ばれる。サンスクリット語には“身体”を意味する語がいくつもあるが、その中でも Skt. piṇḍa は、“食物の摂取・栄養分の蓄積によっ

理論は、どこかに典拠を持つのか、筆者は知らない。
[26] ミサーリー版 p. 457 にあたる。
[27] bhognā … dhoŏnā aiṇ. 未完了現在・二人称単数と解する。
[28] walā ke. ハーシミー訳には「征服して」(U. qābū kar ke) とあるが、Panj. walāŏṇ は to amuse, to divert, to entertain の意味。
[29] jāṭ/jaṭṭ. 西暦 1 世紀以降定住したインド北西部の有力な農耕カースト [岡口 2015]。ラーンジャーの出身部族。
[30] 最後の詩節の swād< Skt. svādu“快楽”も、原義は“味わい、美味”である。

て形成される肉体”を指す。現世的な快楽を味わい、肉体の保守に努めることは、ヒンドゥー教の出家者の道に反する。出家者の道を、ワーリス・シャーは、スーフィーの歩むべき「清貧 (faqr)[31] の道」と言い換える。

修行の厳しさを、ラーンジャーのように笛を吹いて女達の気を惹くことにうつつを抜かしている軟弱者は、到底、耐ええないだろう、というのである。牛 gāiṅ 水牛 mahīṅ はどちらも女性名詞であるから、牛・水牛たちを楽しませ乳を搾る、というのは、もちろん性的な揶揄を含んでいる[32]。

第 261 歌[33]　ラーンジャーはバールナートに抗して食い下がる。

ヨーガ行者 (jogī) たちは、世を捨てて、乞食僧 (faqīr) となっている。この世には惨めさがとても多い。

貸借における詐欺、不正な行い (Panj. anyāṅoṅ < Skt. a-nyāya)、足の引っ張り合いにおいては窃盗が友情である。

五つの感覚器官 (panje hī indriyāṅ)を殺した人 (purukh < Skt. puruṣa) は涅槃 (nirbān < Skt. nirvāṇa) の境地　(Skt. pada) に到達する。

私にヨーガを与えて喜ばせてください。どうして心に怒り (ghuṇḍīyāṅ) を登らせているのですか[34]？

［今までにあなたの許に来た］以前の［弟子たちの］集団 (sangat) を［向こう岸に］渡したように、そのようにこの［私］哀れなジャートの男をも渡してください。

ワーリス・シャーよ、主が敬意を御受取りになられますよう[35]。ヨーガの中には困難 (A. muṣībat) がいっぱいだぞ。

ここでもヨーガ行者達は、ファキール（乞食僧）と呼ばれてスーフィーと同一視される。しかしその内実は、五つの感覚器官 (Skt. indriya) を超越して涅槃に入る、つまり、彼岸に渡る、ことであり、仏教的でさえある。同様の言説は第 270 歌にも見える。

いかなる願望 (Pers. ummīd) も切望 (Panj. tāhngh) も持たない者、そのような

---

[31] A. faqr とは、文字どおりには“貧”。同語根より faqīr“乞食僧”が派生する。

[32] 「乳を搾る」とは、“女達と寝て快楽を得る”ということであろうが、射精の比喩である可能性もある。乳と精液の互換性については、例えば Wendy Doniger O'Flaherty の研究を見よ。

[33] ミサーリー版では p. 458 にあたる。

[34] ミサーリー注は、ghuṇḍīyāṅ を“カーテン”の意味にとり「どうして心にカーテンを上げて［隠し隔てて］いるのですか」とする。

[35] rabb šaram rakkhe.

者たちのボートは結局 (A. ʻāqibat) ［向こう岸に］ 渡る (Panj. pār hunde)。

第 262 歌[36]　バールナートは言う。

ヨーガの道 (Panj. jog dā panth) はマハーデーヴァ (mahāṅ deŏ) （＝シヴァ大神）から出来た。ヨーガはとても難しい。

苦く味のないものが美味となるのがヨーガなのだ。ニームの苦い汁をぐっと飲み干すように。

世界は空虚 (Panj. sunn < Skt. śūnya) なる墓場 (samādh) の［ちっぽけな］円輪 (manḍalī) である[37]。“リム・ジム”(rim jhim) をくびきに繋ぎなさい (jotnā)。その際には灰 (bhasm) を［身体に］塗り、灰になる。奢りや虚栄の余地はない。

ナータ派の修行者はシヴァ神を最高神として崇拝し、墓場に住み、屍灰を身体に塗るとされる。「くびきに繋ぐ」は、典型的なヨーガの語源解釈において「ヨーガ (yoga) とは、馬を馬車に繋ぐ (√yuj) ように、感官を制御することである」と言われることに典拠をもつ。“リム・ジム” (rim jhim) は謎めいた言葉である。rim jhim とは、ふつう、雨などがシトシト降る時の擬音語であるが、ここでは何か別のことを指す隠語として用いられている。ハーシミー注は、rim “女性との同衾” jhim “詐欺” (U. chal, fareb) とする。これに対し、ミサーリー注は rim te jhim と読んで “男と女” と解する[38]。

第 264 歌[39]　バールナートは言う。

このヨーガの誓いは、とても難しい。知覚されない音響 (nād alakh) で法螺貝を鳴らさなくてはならない。

ヨーガ行者 (jogī) 動き回る者 (jangam)[40] ボロを着た修行者 (gūḍrī) もつれた髪の人 (jaṭādhārī) 剃髪した者 (munḍī) 無垢の人 (nirmalā) が乞食を交替

---

[36] ミサーリー版 p. 460 にあたる。

[37] ハーシミー注に従った。「空 (śūnya) についての精神集中 (Skt. samādhi) の曼荼羅」とも解釈できるが、どうであろうか。ハーシミーのウルドゥー語訳は「世界は空虚なる町のようだ」となっており、注と食い違う。

[38] ハーシミー版 jotnā hai rim jhim に対し、ミサーリー版 jhūṭnā rim te jhim となっている。Panj. jhūṭaṇā “揺れる、揺れ動く” つまり「男と女［の色情］を振り払う」というようなことだろうか。あるいは、jhūṭh “嘘” に関係する語とすれば「男と女［の色情］を嘘と思いなす」という風に解釈できるかもしれない。

[39] ミサーリー版では p. 464 にあたる。

[40] ハーシミー注によれば “鐘を叩いて鳴らす修行者” のことであるという。

にする (bhekh waṭāöṇā)[41]。
凝視して、師匠 (nāth) の精神集中 (dhyān) を保持する (dharnā)。そして第十の扉（＝頭頂）まで気息 (sās < Skt. śvāsa) を登らせる。
この世に誕生した者についての喜び (hirak < Skt. harṣa) と悲しみ (sog < Skt. śoka) を捨てる。死んだ者を後から悲しみ嘆かない。
清貧 (Pers. faqr) の名を言うのは容易いが、ヨーガを実行するのはとても難しい。
もつれた髪 (Skt. jaṭā) を洗って日なたに置いて乾かす。常に肢体 (ang) に灰 (bhabhūt) を塗る。
森に住むもの[42]、出家者 (jatī < Skt. yati)、聖者 (satī)[43]、ヨーガ行者は、女性の方を眺めることすらしない。
百万 (lakkh) の美しい妖精や天女 (parī ḥaur) がいるとしても少しも心を満たさない。
“球根” (kandmūl)[44]、芥子 (pūst)、阿片、“子供の酩酊” (baccah našah)[45]を食べて酔っ払う。
現世は夢や空想のようなものであるとみなし、狂って正気を忘れる。
耳環 (mundrā < Skt. mudrā) を垂らして、ジャングルの中に住むこと。ビーン[46]、キング[47]、法螺貝を鳴らす。
ジャガンナート寺院、ゴーダーヴァリー河、ガンガー、ヤムナー［など］常に巡礼地 (tīrth)に行って沐浴する。
成就者 (siddh) たちの祭典[48]を祝う (khelnā)。 西国に九人のナート[49]のお参

---

41 ミサーリー版では bekh (Skt. veṣa) となっており「[様々な]衣装を[交替に]変える」という意味になろう。
42 ミサーリー版の異読 udyān bāšī (Skt. udyāna-vāśī) “庭園に住む者” を採用した。ハーシミー本は adbān bāšī となっており不明。adbān は *obān < Skt. upavana “都市郊外の庭園・森林” の書き間違いか？
43 satī. 文字どおりには “善い女性” を意味するが、この文脈にはそぐわないので、男性名詞 sant として訳した。あるいは、jatī satī が対をなし、新期インド・アーリア諸語に広く見られる類似音を反復する表現 “出家者などの類” になっているとも考えられる。
44 大根やニンニクの意味もあるが、ミサーリー注によれば、麻薬の一種。
45 麻薬の名称であろうが詳細は不明。
46 bīn < Skt. vīṇā. 弦楽器。
47 エークタール（一弦琴）のこと。
48 インド・ウッタルプラデーシュ州にある有名な寺院で行われる祭り。クンブ・メーラーのことか？
49 ハーシミー注によれば、Bālnāth, Pūrannāth, Jalandharnāth, Kālīnāth, Gopīnāth, Gorakhnāth, Macchandarnāth, Cītnāth, Mangalnath.

り (Skt. darśana) をすること。
欲求 (Skt. kāma)、怒り (Skt. krodha)、貪り (Skt. lobha)、自我意識 (hankār < Skt. ahaṃkāra) を殺し、ヨーガ行者は土にまみれる。
［一方、君は］女達を眺めながら、歌をうたいながらまわっている。野性児 (A. waḥšī) の君にとって、ヨーガを行うのは難しいぞ。
これはヨーガである。欲求を捨てた人々 (nirāsī < Skt. nir-āśī) のする事である。君［のような］ジャート族の男が、ヨーガから何を得ると言うのだ？

「知覚されない音響」 (nād alakh) とは、ハタ・ヨーガの修行で聞こえると言う、物理的な音になる前の段階の音響“打たれざる音響” (anāhata nāda) である[50]。この音響を体得するための修行において、法螺貝やビーン、キングなどの様々な弦楽器が用いられる。さらにハタ・ヨーガの修行では、気息を制御することによって性エネルギー（シャクティ）を頭頂まで引き上げ、頭頂にあるとされる“梵天の穴” (Skt. brahma-granthi) を突き破る、と言われるが、この歌ではそのことについても言及している。

第 266 歌[51]　バールナートは言う。
忍耐 (A. ṣabr) の馬に唱名 (A. ẕikr) の手綱をつけて魂 (A. nafs) を打つ（＝制御する）ことは、とても善き人々の務めである。
財 (Pers. zarāṅ) と権力 (A. ḥukm) を捨て、貧者 (A. faqīr) となること、これは善き人々の務めである。
愛 (A. ʻišq) すること、剣の刃を通り過ぎることは、腹を空かせた裸形の者たちの務めではない。
［進んで］死のうとする者たちは、清貧 (A. faqr) についてよく知っている。ここには、頑固な者のための場所はないのだ。清貧は、頭をすでに通り過ぎた（＝生きる望みを超越した）者たちの務めである。
好きという気持ち (A. šauq)、慈悲 (Pers. mihr)、正直な言葉 (A. ṣidq)、確信 (A. yaqīn)を持たないで小さな欠片を乞い求める者たちに、［清貧から］どんな得があると言うのか。
ワーリス・シャーよ、愛の色 (Panj. ʻišq de rang) に染まった者にとり、自分自身が拠り所である。

前述のとおりヨーガの語源説明として、yoga という語が語根 √yuj 「［馬な

---

[50] ただしハーシミー注は nād alakh の意味として、an'had (Skt. anāhata) とならんで singhā“角笛”も挙げており、その場合は“アナーハタ・ナーダを体得するために用いる角笛”ということになる。
[51] ミサーリー版では p. 469 にあたる。

どを馬車］に繋ぐ」から派生したことがよく引き合いに出される。一方スーフィー思想でも同様の比喩を用いる[52]。ここ第 266 歌では、ヨーガは「清貧」(fiqr) と呼ばれ、その内容は主にアラビア・ペルシア語彙を用いて記述される。つまり、ここでは修行をスーフィー的文脈に置き換えているのである。

最後の詩節「ワーリス・シャーよ、愛の色に染まった者にとり、自分自身が拠り所である」は、新期インド・アーリア諸語の作詩伝統で bhaṇitā と呼ばれるもので、著者の名前（ワーリス・シャー）が織り込まれている[53]。この種の詩節では、他の詩節とは違って著者自身の第三者的な視点からのコメントが述べられていることが多い。ここにはワーリス・シャーの、バールナート厭世的修行者論に対する一抹の批評が感じられるようでもある。バールナートが愛を世俗的なものとして全面的に退けるのに対し、ワーリス・シャーは、愛の色に染まることを必ずしも否定してはいない。とはいえワーリス・シャーは、バールナートの教えに真っ向から反論することをしない。むしろ場面に応じて、時にはバールナートの口を借りて自論を語り、別のときにはバールナートに異教の教えを語らせ一貫性がない。そこには、ナータ派の教義を批判したいという強い動機は感じられない。

第 267 歌[54]

バールナート師の説得にもかかわらず、ラーンジャーは出家の決意を曲げようとしない。バールナート師も若者の熱意に次第に心が動かされていく。

死ぬことに対し身じろぎしなく (Panj. asthir < Skt. sthira) なった者がヨーガをする。ヨーガを習いに来たのなら、習うがよい。
決意 (nehcā < Skt. niścaya) を抱いてグルの世話 (Skt. sevā) をしなさい。これこそがヨーガ行者達の命じることである。

---

[52]「御者を思い描け。彼は馬車に乗り、馬を操っている。馬車は知性を表しており、そのおかげで人間はいま自分がどこにいて、何を為すべきかを知ることができる。馬車は人と馬が一体となって働くことを可能にしている。[…] 馬は馬車を走らせるのに必要な動力であり、感情や情熱と呼ばれる心のエネルギーである。御者は他の二つよりも優れた方法で、馬車の存在理由や可能性に気づくことができる。御者がいなければ、馬車を正しく動かすことも、目的地に到達することも不可能である。」[イドリース・シャー1996:310f]
注によれば、ダマスカスからデリーに至る広い地域のスーフィーの修行場で、このモチーフのさまざまなヴァリエーションを見ることができる、という。

[53] アラブ・ペルシア詩にも同じように最終詩節に詩人の雅号 (taxalluṣ) を詠み込む習慣がある。

[54] ミサーリー版では p. 471 にあたる。

正直な言葉 (A. ṣidq)・確信 (A. yaqīn)・敬虔 (A. taqwā)を結んで、信心者ダナー (Dhanā Bhagat)[55] は石の中から主 (A. rabb) を得た。
心の汚れ (Panj. mail < Skt. mala)[56]をきれいに洗い落すと、すぐにグルは主 (rabb) を御見せになった。
弟子よ、[まさに] この身体 (kalbūt)[57] の中に、真実なる神 (Panj. sacce rabb) は居場所を作った（＝いらっしゃる）のだ。
ワーリス・シャー殿よ、あらゆるものがあの御方である (Pers. hamah ū'st)。すべての中に御主人様 (bhagwān < Skt. bhagavān) は [居場所を] 得たのだ。

第 268 歌[58]　ついにバールナートは根負けし、宇宙に浸透する神についての奥義を開示する。
ネックレスの玉 (pl.) の真中を一本の紐が [貫いている。] そのように、あらゆるものの中に行きわたっている。
あらゆる生き物の中に生命がある。大麻 (Panj. bhang) や阿片の中に酩酊があるように[59]。
メヘンディーの葉から色ができるように、世界の中に生命が現れる。
身体 (sarīr < Skt. śarīra) の中に血 (rakat < Skt. rakta) と気息 (sās < Skt. śvāsa) がある[60]ように、光 (jot < Skt. jyotis) の中に光となって行きわたっている。
ラーンジャーは説得する努力をした。ヨーガ行者は自分のすべての力を込めて [それに抗った]。
ワーリス・シャー殿よ、愛してしまった (Panj. 'išq laggā) 者は、宗教・世俗

---

55 ハーシミー注によれば、ジャート族の有名なヨーガ行者。
56 Panj. mail の母音 ai は、名詞 Skt. mala 'dirt' よりもむしろ形容詞 Skt. malina 'dirty' とのつながりを示す。"心" あるいはヒンドゥー教の概念 "個我" は本来穢れもなく属性もないものであって、それが不浄有限な現世に縛られ、現世的な汚れ (Skt. mala) に付着されて身動きが取れなくなっている、ということは、ヒンドゥー教の解脱論、特にシヴァ教の教義においてよく言われる。[早島 1993:163]
57 Panj. kalbūt. "A mould, a form, an image" [Singh 1983:538]. 語源は不明。ミサーリー版 (p.471) では A. qalūbat となっている。A. qalūbat は辞書には記載がないが、おそらく "枠組みとしての身体、体格" という意味 (cf. A. qālib)。
58 ミサーリー版では p. 472 にあたる。
59 面白いことに、この言説は、古代インドの唯物論者 (Cāruvāka) 達の主張「心の活動は、元素の化学反応に過ぎず、酒の酩酊のようなものである」を微かに想い起させる。
60 原文を素直に訳すとこの様になるが、ハーシミー注は「身体の中に血、血の中に気息が」と解釈する。

(dīn dunī < A. dīn dunyā) の務めから離れ去った。

ネックレスのたくさんの玉が一本の紐に貫かれている。丸い玉は、霊魂を象徴するのであろう。あるいは、まばゆくきらめく宝石は、夜空の星ぼしに似ている[61]。

麻薬性の薬草の葉に含まれる成分から酩酊が得られるように、メヘンディー（ヘナ）の葉の粉末を水に溶いたとたん、真っ赤な色が拡がる。この紅い色は、身体に行きわたる血液の色と同じである。苦しげなうめき声とともに傷口から滲み出る血液のしずくは、ネックレスの紅玉のようだ。さらにネックレスの宝石の光沢や鮮血のまばゆい紅さは、宇宙空間に散りばめられる無数の星の輝きを想い起させる。そして、生命力を象徴する紅色は、人の心を染めあげる愛の色でもあるのだ。

ここに見られる“ネックレスの宝石”、“赤い血のしずく”、“輝く星”という連想は、南アジアに限らず、イスラーム世界に共通するものらしい。オスマン朝の詩人ファーティヒ (Fatih) 作の次のようなガザルがある。

私の涙によって、あのひとの唇の紅玉はつややかである
惑星の輝きによって、バダフシャーン産の紅玉は色づく[62]

オスマン宮廷詩の研究者イスケンデル・パラの解説によると、この詩のこころは次のようなものである。バダフシャーン（バクトリア）は宝石ルビーの名産地である。ルビーは、もともと白色の石であるが、肝臓の血に浸してから陽光に晒すと赤くなる、という伝承を踏まえた詩である。愛の苦しみに私は血の涙を流し、それを吸い取る紅玉（＝恋人の唇）は赤く色づく、というのである。また、血の涙のしずくの、ひとつひとつは輝く星なのである。[Pala 2002: 66]

このようなイスラーム地域に流布する共通した連想の“鎖”があり、ワーリス・シャーもそれを踏まえたのだろう。ただし、その際にワーリス・シャーが採用した「光」jot は、天体の輝きを言うのに用いられたサンスクリット語 jyotis に由来する語彙である。

---

[61] ただし、ここで「玉」と訳した Panj. mankā は、材質を限らず、紐を通した玉状の物を表す語であって、必ずしも宝石であるとは限らない。この歌の、ヨーガについて述べる文脈からすると、ここで念頭に置かれているのは、宝石のネックレスではなく、放浪修行者が首に掛ける、ルドラークシャ樹の実を繋いだ質素な数珠 (akṣamālā) であるのかもしれない。

[62] Eşk-i çeşmimle olur lâ'l-i leb-i yâr ferah / Tâb-ı kevkeble bulur lâ'l-i Bedahşân revnak

第 276 歌[63]　バールナート師はラーンジャーの得度を許す。

バールナート師はディードゥー（Dhīdū ＝ラーンジャー）を前に呼び、ヨーガを授けるためにそばに座らせた。

丸坊主 (Panj. rūḍh bhūḍ) となり顔には灰を塗った。そして全ての親族の名を罵った[64]。

耳を裂いて (Panj. kann pāṙ ke)、貪欲 (A. ḥirṣ ḥasrat) を掃き清め、瞬く間に丸坊主にして見せた。

息子に父が乳を飲ませて可愛がるように、

灰を肢体に塗り込んで頭を剃り[65]、耳環 (mundrāṅ < Skt. mudrā) を着けさせた。

報せは世間じゅうに広まった。「ラーンジャーがヨーガ行者の精髄 (Panj. jogīrā sār) を観得した」と。

ワーリス・シャー殿よ、金細工師 (Panj. suniār) のようにジャート族の男（＝ラーンジャー）を曲げて砕き、教え諭した (Panj. gālēā)。

ナータ派の修行者は、身体に灰を塗り、耳環を付けている。耳に切れ込みを入れているので Kān'phaṭa “耳を裂いた者” との異名を取るが、ここでもそのことが言われている。

最終詩節の Panj. suniār (< Skt. svarṇakāra)“金細工師”は目を惹く表現である。サンスクリット語 śūnya “空” と svarṇa “黄金” が、ともにアパブランシャ語で sunna という語形になることから、タントラ文献では “空” と “黄金” が掛け言葉として用いられた。ここにもそのような中世神秘主義的隠語のかすかな残響が聞こえるようである。錬金術師が石ころを黄金に変じるように、ナータ派の導師は若い弟子の愛欲を覚醒するためのエネルギーに変ずるのであろう。南アジア中世におけるハタ・ヨーガ行者と錬金術師の関連については White 1996 が詳しい。

しかし、この後の話では、ラーンジャーがバールナートの許での修業に満足せず、立ち去ることが語られる。ただし、師と弟子は、けんか別れするのではない。師は暇を乞う弟子に祝福を与え、ラーンジャーは放浪修行者となるのである。ラーンジャーが奥義を伝授されたヨーガは否定されず、その後の物語でもラーンジャーはヨーガ行者のままなのである。それは、若き修行

---

[63] ミサーリー版では p. 486 にあたる。

[64] 現世的な関係性を断ち切る目的で。

[65] ハーシミー版 sar mun akkhīṅ pā. akkhīṅ (‘eyes’) は不明。ミサーリー版の読み sar mun ḍāṙhī なら「頭と髭を剃って」となる。

僧ゴータマ・シッダールタが悟りを開く前に、さまざまなグルのもとを遍歴したが飽き足らず、ついにはそれらを超越して覚醒した過程に似ている。

もう一つ思い浮かぶのは、『ヒール』の基になった民間伝承は、もともとヒンドゥー教の恋愛物語で、その主人公はナータ派のヨーガ行者だったのではないか、という疑問である。たとえばデカンで作られたダカニー語（ダカニー・ウルドゥー語）の古い物語詩ジャンルには、しばしばナータ派の行者（魔術師）が登場する[66]。ダカニー語で書かれた現存する最古の物語詩『カダムラーオ・パダムラーオ』は、竜（ナーガ）族とナータ派の行者との神通力を駆使した力比べを題材としており、物語の筋自体はヒンドゥー教のおとぎ話である。パンジャービー語の物語『ヒール』も、もともとそういった類のものだったのではないか。

これまで観てきたように、ワーリス・シャーは、時折、ナータ派の教義やヨーガの修行法についての記述をスーフィー的文脈に引き付けようとするが、その努力は僅かである。多くの個所においては、民間伝承そのままの異教的匂いの濃厚なテキストを、改変の手をほとんど加えずに、そのまま転用してしまったように見え、文学作品としてそれほど高度な芸術性を持つようにも見えない。しかし時折、アラビア・ペルシア語語彙をふんだんに使った技巧的なくだりがあり、あるいは芸術的な表現がキラリと光ることがあり、そういった箇所は、ことによると、詩聖ワーリス・シャーが本領を発揮した部分なのだろうか[67]。

以上見てきたとおり、『ヒール』におけるナータ派のヨーガ行者の描写とその教義を述べた個所には、サンスクリット語の宗教用語が占める割合が高く、ナータ派修行者の伝承（おそらく口伝される修行歌）が下敷きとされている可能性が強い。ワーリス・シャー（および多数の無名のムスリム詩人達）は、これにアラビア語・ペルシア語の宗教語彙を混ぜ込んでスーフィー的なテキストに改造しようとしたが、その作業は取ってつけたパッチワークのような印象が強い。むしろ、心に強く訴えかけてくるのは、第 268 歌の「ネックレスの玉 (pl.) の真中を一本の紐が［貫いている。］そのように、あらゆるものの中に行きわたっている」という詩節で始まる一連の、生き生きとしたメタファーである。これらの歌の聴き手である民衆にとり、強烈に感覚されたのはメタファーの描きだす鮮明なイメージであり、それがどの宗教のどの教義に由来するものであるか、という事は、大して重要ではなかったであろう。南アジアにおけるスーフィー思想とその歴史に関する研究では、ある人の流派・教義の所属がどうであるか（つまり、西アジアのどのスーフィー教団に

---

66 ビージャープル文壇の代表的詩人ヌスラティーの物語詩『愛の花園』(Gulšan-ĕ-'Išq)など。

67 たとえばヒールの身体的美を描写した第 56－57 歌など［北田 2015B］。

連なるか)、ということが問題にされていることが多いようである。しかし、現地語（新期インド・アーリア諸語）による民衆文芸テキストを読むと、このジャンルの作品が人気を博し爆発的に流行する起爆剤になったのは、むしろメタファーの持つ表象の力と、その中にあふれる土着的感性の方であったということが明らかになる。

【文献表】

１.『ヒールとラーンジャー』テキスト

ハーシミー版　Hāšimī, Ḥamīdullāh Šāh（出版年不明）*Matan, urdū tarjumah va ḥall-i muškil alfāẓ, Vāriṣ Šāh Hīr*. Urdū tarjumah: Ḥamīdullāh Šāh Hāšimī. Maktabah Dāniyāl (Maktabah Daneyal), Lāhor.

ミサーリー版　Miṣālī, Yūsuf (2005) *Šarḥ-ĕ-Kalām-ĕ-Wāriṣ Šāh, Hīr Rānjhā*. Tarjumah wa tašrīḥ. Muštāq Buk Kārnar, Lāhor.（出版年の記載はないが、前書 7 頁に 2005 年 11 月 21 日の日付が記載されており、それによって代用する。）

２．外国語の二次文献

Cunnings, Thomas & Bailey, T. Grahame (2005) *Panjabi Manual and Grammar: A Guide to the Colloquial Panjabi of the Northern Panjab / An English-Panjabi Vocabulary of 5800 Words*. Sang-e-Meel Publishers, Lahore, reprint. (First Print: Calcutta 1925)

Briggs, Geroge Weston (2009) *Gorakhnāth and the Kānphaṭa Yogīs*. Motilal Banarsidass Publishers, Delhi (reprint). (First Indian Edition: Kolkata 1938)

Gold, Ann Grodzins (1992) *A Carnival of Parting: The Tales of King Bharthari and King Gopi Chand as Sung and Told by Madhu Natisar Nath of Ghatiyali, Rajasthan*. University of California Press, Berkeley/Los Angeles/Oxford.

Pala, İskender (2002) *Şi'r-i kadim. Şiir şerhleri*. İstanbul: Leyla ile Mecnun. 4. Baskı. (L&M kitaplığı yayın no: 15, makale dizisi: 1)

Singh, Bhai Maya (1983) *Punjabi English Dictionary*. Lahore: The Vanguard (reprint).

White, David Gordon (1996) *The Alchemical Body: Siddha Traditions in Medieval India*. The University of Chicago Press, Chicago/London. (Paperback edition 2007)

３．日本語の二次文献

イドリース・シャー編著・美沢真之介助訳 (1996)『スーフィーの物語、ダルヴィーシュの伝承 Tales of Dervishes』、平河出版社。

岡口典雄 (1988)『エクスプレス・パンジャービー語』白水社。

岡口典雄 (2015)『パンジャービー語・日本語辞典』三省堂。

北田信 (2015A) 「パンジャーブの土着的イスラーム信仰と音楽、ワーリス・

シャーの物語詩『ヒールとラーンジャー』における音楽」、『宗教音楽における声と文字、東南アジア地域からの展望』京都大学地域研究統合センター共同研究（平成 25 年度～平成 27 年度）研究成果論集、104－112。
北田信 (2015B) 「ワーリス・シャーの愛とエロス～パンジャーブ語のスーフィー文学『ヒール』」、西南アジア研究 No. 83(2015)、京都大学。
萩田博 (1996)『基礎パンジャービー語』、大学書林、平成 8 年。
早島鏡正ほか (1993) 『インド思想史』東京大学出版会、第 8 刷。
萬宮健作 (2010)『平成22年度言語研修スィンディー語研修テキスト 1 、文法』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。

本論文は科学研究費補助金 15H03282 による補助を受けたものです。